2007.5.31

№145

編集　樋口　みな子

E-mail
minginga@agate.
plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740－7－56535
（6号分1,000円）

薫風に揺れるスズラン

野幌も新緑が美しい季節になりました。４月から夫は札幌東区の美香保中学に異動になりました。通勤時間が早くなり、７時に家を出る毎日です。それでも私たちが結婚当時、義姉の勤務していた学校ですし、かつて勤務した北辰中学とは隣通しで親しみが持てたようです。息子は大学２年生で、友人とのつきあいが多くなりました。学ぶ中で自分のやりたいことが見つかればいいなあと思います。

我が家の庭に今年もたくさんのスズランが咲きました。この花の季節になると、ほんの少ししか暮らしたことはないのに日高の春を思い出します。坂道の両側にたくさんのスズランが咲いていました。香りが良く愛らしい鈴が一斉に風に揺れて今にも鈴の音が聞こえてくるようでした。

私は、家事と山と、自然を守る活動で忙しくしています。北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会の事務局と、日本山岳会北海道支部のの自然保護委員長を引き受けました。山をいつまでも美しいままで楽しみたいから、ささやかでも社会参加していたいと思います。でも相談したり、共に活動してくれる人がいたらいいなあと思います。連絡だけでも時間がとられてしまいます。

我が家の庭に咲いたスズラン

前回の通信の発送作業をしていた３月１６日に山の仲間のＴさんの訃報に接しました。最後の会話は「咳がとまらない。しばらく安静にしているよ」といつもと変わらないＴさんでした。まだ６６歳の若さでした。彼がリーダーの時の山行は、必ず全員が頂上に立つことが出来たそうです。リーダーは地形を見、気象の判断をし、仲間の足並みを見とさまざまな事を観察しているのだから重い荷物は担がせてはならないと教えてくれました。

癌がいつの間にか消えていたと話していたこともあり何故かまた治るのだと信じていました。まだまだ教えて貰いたいことがたくさんあったのに残念で悲しいです。Ｔさんも千の風になって私たちを見守ってくれているでしょうか？

そんなある日、旭川にいた頃の友人でＮＨＫのアナウンサーだった檀上滋さんからお便りとＣＤが届きました。第二の職場も辞し第三の旅立ちとありました。その最初の仕事が後輩で、ＮＨＫの顔として活躍された宮本隆治アナウンサーに朗読をしてもらう事と記されていました。

「千の風」の朗読バージョンです。早速聴いてみました。歌ももちろんいいけれど、静かにありし日のＴさんを偲ぶには、朗読のほうがすっと言葉が心に入っていくようでした。レコード店に置いています。是非、聴いていただけたらと思います。「宮本隆治の千の風になって」発売元はハーモニーです。

みな子の山旅日記

巨大な雪洞

３月２１日～２２日、チセヌプリとイワオヌプリにＪＡＣ北海道支部から１１人と九州支部６人のメンバーとで、スキー、スノーシューで登りました。なんといっても圧巻は２２日に掘った巨大な雪洞です。

チセヌプリ下山後、五色温泉からさらに奥の最終駐車地点に車を置き、２０ｍ程中に入った所を雪洞場所に決め、３箇所から穴を掘り出したのは午後２時半でした。ものすごく堅い雪でなかなか掘り進みません。入り口が一番大きかったのは、Ｔさん、Ｍさんのチームでした。私も中に入って、スコップで雪を削ろうと努力しましたが、全然歯が立たなかったです。

写真撮影　高畠拓生さん
雪洞の中での食事

中に入って果敢に掘っていたＲ子さんの体力に圧倒されました。北九州の紅一点Ｈさんもスコップを手に初めての体験を楽しんでいました。力強く雪を掘り出す北九州支部のさんＳさん、Ｍさん、Ｙさんは「雪の多さにビックリ。このような体験をさせてもらい、感激している」と語っていました。ビデオを回すＩさん、カメラを構えるＴさんら。私たち女性は掻き出した雪をブルーシートに載せて運び出し作業でした。

ひとりが横になって寝られる幅になったところで、今度は横に掘って行き、３つの穴が貫通した瞬間思わず、つながった！の歓声と拍手が起きました。整地したり、天井がつぶれないように円くしたりして完成。

大雪洞に、１７人が入り４つの班に分かれて、夕食はラムシャブで北海道の味を楽しんで頂きました。

春の日射しを浴びて察来山へ

快晴の増毛山地　07.3.31　　写真提供　仲俣善雄さん

察来山頂上で

３月３１日当別四番川から、察来山に登ってきました。メンバーは３人。案内人は私？足周りはスノーシューです。　８時５０分出発。姿は見えませんが、アカゲラのドラミングに心なごみました。スノーモービルの姿もなく静かな山歩きの開始です。

林道が送電線沿いに続き、迷う所はありません。山頂に続く稜線は雪庇で、出来るだけ樹林寄りに歩きましたがぽっくりと亀裂が入った所がありました。

今日は天気も良く迷うこともありませんでしたが、見通しの悪い時の頂上付近は注意が必要です。頂上からは、尖った黄金山が格好良くそびえていました。真っ白な暑寒別、南暑寒別が輝いていました。

頂上近くで、ｙｏｃｈｉｏさんご夫婦に会いました。「ヤー、みな子さん焼けてるね！」が挨拶でした。

急斜面の下りは、尻滑りを楽しみました。登りは、それほど苦にはならなかったのに、帰りの林道が長かったです。

登り２時間。下り１時間２０分でした。駐車地点で、ランチ。浜益温泉で汗を流して帰宅しました。

一等水準点の山　浜益御殿

５月１日、石狩市と合併した浜益市街のコンビニに６時半集合。メンバーは４人です。更に北上して「幌」市街で林道に。林道終点は一般車両立ち入り禁止の看板。駐車スペースあり。

8:14登山口発。林道をひたすら歩き約2キロで緩やかな尾根に取り付きました。（1時間30分）スキー組はリズミカルな歩調で、どんどん行きます。スキーが上手な人は歩き方も格好がいいんですね。体がまっすぐ、右にも左にも揺れません。　ひたすら感心しながら後ろから行きました。

私と友人はスノーシューです。途中、熊の足跡が。もう活動を始めているんですね。Ｐ615からＰ835にいたるルートは尾根幅が広く、樹林帯でいかにも迷いやすいです。

浜益御殿頂上で

今回は何度も登っているＤさんが的確なコースを進んでくれるので快適に進みます。ガスがかかったらルート旗やテープでしっかり目印をつけなければと思いました。Ｐ835を過ぎた辺りから急になり尾根の東側は切れ落ちている。　明瞭な尾根を登りきると、御殿の頂上でした。ものすごい強風に吹き飛ばされそうになりました。浜益岳、暑寒別岳が一望に。尾根の向うには日本海が見えて、素晴らしい。

少し下ったコルでランチタイム。スキー組の二人はあっという間に下山。いつの間にか姿はありませんでした。　スノーシュー組は、林道に出るまで来た道を忠実に辿り下山。つぼ足二人組と、抜きつ抜かれつしながら２時、登山口に着きました。

頂上まで休憩も含めて３時間１０分。下山は２時間でした。スキーは早かったでしょうね。

浜益温泉の近くの森でアオサギのコロニーを見ました。１５ぐらいありました。雛から孵ったばかりのアオサギが、飛行の練習中で、なんとも愛らしい。　春の風物詩ですね。

濃霧で頂上断念！大千軒岳

毎年追悼ミサが行われる金山番所で

５月４日、青い山脈の代表である清水和男さんから案内をいただき大千軒岳山開き登山に　参加しました。

知内川コースです。積雪のため林道途中で車をデポし、登山口まで歩きます。登山口駐車場に青い山脈会員や、札幌からの参加者ら１５人　で７：３３、登り始めました。立派な観峡橋を渡ると知内川沿いにたくさんのカタクリ、キクザキイチゲが咲いていて可愛い。増水した知内川の右岸を進むが、急な岩場を何度も高　巻き、倒木を伝って左岸に渡渉したのは８：４０でした。

広い河原の渡渉は、リーダーが安全なコースを選んで進んでくれたおかげで　無事に渡渉を終えました。金山番所９：５５。　再び右岸に渡り、残雪の詰まった沢や尾根筋の急斜面を喘ぎながら登る。　休み台に１０：５２でした。強風と、ガスで視界が利かないなかで尾根に出ましたが、ここで引き返すことに。１２時でした。風のあたらないコルで昼食をとり１２時２０分下山を開始。急な雪渓をどんどん降りて、登山口１５：４０でした。

清水和男さんは、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会でも長いおつきあいのある方ですが大千軒岳のパトロールを１９年も続けて来られました。若々しい健脚ぶりに勇気づけられました。

深田久弥終焉の山　茅ヶ岳

５月２０日に八が岳の麓で日本山岳会の山環ネットの会議があり、２１日、５人で深田久弥が亡くなった山茅ヶ岳に登って来ました。

宿の主人が、送って下さったので、２台の車は金ヶ岳側の駐車場に置き縦走しました。

駐車場から、登山道とは逆方向にある深田久弥の記念公園により御影石を見学。この御影石から茅ヶ岳が映るのです。「百の頂に　百の喜びあり」と深田さんの　字で刻まれていて、山頂がくっきりと映し出されていました。

登山口８：５５発。前山大明神林道を横切って、女岩に着いたのは１０：５５です。ここでひと息。滴り落ちる水を飲み、鋭気を養い、右手からいったん女岩の上部に出て新緑の広葉樹林帯を歩きます。厳しいジグザグ道ですが、緑の美しさに疲れが和らぎました。足下にはムラサキケマン、岩の下にはイワカガミがけなげに咲いていました。（４ページに続く）

オオカメノキが新緑の映えて美しい。尾根道を少し行くと、深田久弥終焉の地に石碑があります。やせた露岩の尾根に登るとそこが頂上でした。１１：０５着。

すっきりと晴れ上がり、八ヶ岳、金峰山、北アルプス、甲斐駒ヶ岳、北岳など３６０度の大展望に感激しました。いつまでもみていたいねと話ながらランチタイム。茅ヶ岳１１：４３発ここから急な下りを経て目指す金ヶ岳の荒々しい岩肌が迫力があります。金ヶ岳頂上１２：３０。少し下山した所から振り返ると、富士山がまるで空に浮かんでいるように端正な姿を見せて何枚もシャッターを切りました。今登ってきたしんりょくの茅ヶ岳が三角形で富士山と並ぶと親子のようです。ここまで登ってきた甲斐がありました。

山環ネットの皆さんと

空に浮かぶ富士山と親子のような茅ヶ岳

名残を惜しみながら、ひたすら急斜面を下り登山口に１３：５５。前山大明神林道を歩いて駐車場に１４：０５でした。

私以外は東京在住で、なじみのある山ですが私は初めて登った山でした。優美な裾を覆う広葉樹が素晴らしかったです。

山環ネット事務局の富澤さん、自然保護委員長の山川さん、宮崎さん、西田さんお世話になりました。

北アルプスと八ヶ岳

藪をこいで隈根尻山まで　浦臼山～樺戸山～隈根尻山

５月３０日、友人と３人で浦臼山から隈根尻山まで登りました。

渡渉箇所が１箇所。展望台からは残雪の芦別岳と夕張岳が眺望でき、若草色の広葉樹林に春紅葉の優しいオレンジと黄色がまじり美しい。これからが大変。浦臼山から樺戸山までのアップダウンが厳しく、暑さも加わり喘ぎながら登りました。雪解けが遅かったのかカタクリの群落に迎えられ元気をもらいました。シラネアオイ、ニリンソウ、ヒメイチゲ、エゾイチゲ、ショウジョウバカマ、オオカメノキ、フギレオオバキスミレ、オオタチツボスミレ、ミヤマスミレ、ミヤマキンバイなどたくさん。

樺戸山でランチタイム。ここで隈根尻まで行くかどうかが問題。私はもう十分で、ここから下山してもいいかなと思いましたが、６０代のＹさんの「行ってみよう」の言葉に背中を押されて出発。

登山道は笹で覆われ藪こぎをしながら進みました。急斜面です。登山口から３時間２５分かかって到着。ブヨもすごかったです。

頂上からはピンネシリ、南暑寒別だけ、暑寒別岳、群別岳、浜益岳などが３６０度のパノラマで広がっていました。

往路を引き返しましたが、真っ白なカタクリに出会え感激でした。

雪渓が残ったコルから隈根尻山までは藪こぎをして登ります。

白いカタクリ

ショウジョウバカマ

登山口８：４０　浦臼山頂上１０：１５　樺戸山１２：０５ランチタイム樺戸山１２：２０出発　隈根尻山１３：００　登山口１６：３０

豊かさと棄民たち　水俣学事始め

原田正純著　岩波書店　１１００円＋税

私が水俣病に出合ったのが１９７９年代でした。東京の学校を出て臨床検査技師として一歩を踏み出したのが大阪府の守口市にあるＭ電器健康管理センターの産業衛生部。あちこちの工場へ行って公害の分析をする仕事でした。ある工場からカドミウムの垂れ流しが発覚したのです。しかし、企業から大きなお金が動き新聞には載りませんでした。大企業とは、平然と住民の命よりも経済効率優先である事を目の当たりにしました。

そんな経験もあって水俣病や公害には大きな関心を寄せてきました。再び水俣病と向き合ったのは、旭川で「水俣」写真展を開催することになり、その実行委員長を引き受けたのです。若さとは無謀ではあっても輝くような情熱があるのですね。私は大学病院の仕事を終えると、自然保護や障害者の自立を目指す運動などさまざまな人たちと出会い、多くの市民を巻き込み写真展を成功させました。その時、熊本からはるばる医師の原田正純さん、作家の石牟礼道子さん、原告団の川本輝夫さん、胎児生水俣病の坂本しのぶさんが来道されたのです。３０年前の事ですが、患者の立場に立って発言された原田さんの姿が印象に残っています。

水俣病と係わりあうようになって４５年になる原田さんは、新潟やカナダ、アメリカ、ニューメキシコ州など国内外の公害現場を訪れた経験から差別のある所に公害が起こると確信したと語ります。公害をなくすことは、技術や資本を誰のためにどう使うかが問題なのだと訴えます。

水俣学を弱者の立場に立つ学問を模索したいと大学生に共に考える素材を提供しています。各地にさまざまな水俣学の種がまかれることを願っていると結び、今も変わらぬ情熱が伝わってきます。

海峡のアリア

田　月仙（チョン・ウォルソン）著　小学館　１５００円＋税

日本と朝鮮・韓国の歌曲を歌う在日二世のオペラ歌手である田月仙さん。この本は、朝鮮半島と日本に引き裂かれた一家に生まれた田さんの半世紀です。小学館ノンフィクション大賞に選ばれました。

父の事業失敗、朝鮮学校卒を受験資格と認めないという差別を乗り越えて、唯一門戸を開いた桐朋学園短大に入学。卒業後はオペラ歌手の道を進みます。

帰還事業で北朝鮮に渡った４人の異父兄。２０年後にようやく著者と母は訪朝がかないますが、３人の兄は政治犯として９年間も政治収容所に入れられた後でした。しかも１人はすでに亡くなっていました。母は息子たちを救うべく奔走しますが、病気の息子たちは次々と息絶え、母も力尽きて亡くなりました。母の無念を晴らしたいとの思いが胸に迫りました。

著者は、日本、韓国、北朝鮮という３つの矛盾にたいして筋を通したい、疑問や壁を乗り越えたいと思ってきました。そんな気持ちを代弁するかのように出合った歌が「高麗山河わが愛」です。「南であれ北であれ　いずこに住もうと　みな同じ　愛する兄弟ではないか・・・美しい高麗山河　わが国　わが愛よ」と「歌うことは、祖国は一つであることを確認したい」。その強い願いが文章にあふれています。是非、田さんの歌を聴いてみたいと思いました。

新北海道の花

梅沢俊　著　北海道大学出版会　２０００円＋税

旧版「北海道の花」の全面改定は１４年ぶりになります。写真と解説を書いた梅沢俊さんは、新種リシリアザミの発見者でも知られ、朝日「天声人語」でも取り上げられました。本文２１１ページにあります。

道内各地で増えている外来植物も含めて７００種多い１９００種を収録。良く似た花の違いがわかるように細部のアップ写真を多数掲載し、解説も充実させています。微妙な色の花については新たに写真付きの索引が設けてあります。フィールドで使いやすいようにタテ長のポケットサイズ。紐しおり付き。

これから夏山シーズン。花好きにはもちろんのこと、高山植物保護パトロールで山歩きの必携になりそうです。

嘘つきアーニャの真っ赤な真実

米原万里著　角川文庫　５５２円＋税

オリガ・モリソヴナの反語法

米原万里著　集英社文庫　７４３円＋税

打ちのめされるようなすごい本

米原万里著　文芸春秋社
２２８６円＋税

昨年５月、５６歳の若さで亡くなったロシア語通訳者として活躍された、米原万里さんの本を小野有五さんが民医連新聞で紹介していました。早速私も読んで見ました。

登場人物たちが生き生きとして、すっかりはまりました。

米原さんは１９６０年から１９６４年までチエコスロバキアの首都にあった「在プラハ・ソビエト学校」に通っていました。この８年制の小中学校に、５０ヶ国以上の子どもたちが集まっていました。この本の表題になった「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」「リッツァの夢見た青空」「白い都のヤスミンカ」。３編のノンフィクションの主人公は米原さんの同級生です。子ども時代の会話がすごく率直で面白いですが、プラハの春を踏みにじったソ連・東欧軍の進入、ソ連の崩壊と激動の３０年を経た３人の同級生の消息を米原さんが訪ね歩く各章は驚きの連続。３０年を経ても変わらない友情と生き生きとした会話に思わず引き込まれます。友人のみではなく彼らの父母の世代の歴史にまで視野が及んでいて、奥行きを深くしています。

ルーマニアの要人の娘であったアーニャは貴族並みの贅沢な暮らしを満喫していました。その３０年後、イギリス人と結婚したアーニャと再会した著者に語る真実は・・・。貧困をなくし平等の世界を目指していたはずなのに、アーニャとその家族こそがこの矛盾を体現した存在であることに表題にこめられた反語になっていて痛快です。

ドゥマゴ文学賞を受賞した「オリガ・モリソヴナの反語法」は事実をふくらませて書いた小説ですが、当時のソ連の歴史をリアルに知る機会になりました。

舞台は同じプラハのソ連学校です。そこにいた天才的な舞踏教師のオリガ・モリソヴナの謎を解いて行く物語です。

あれから３０年の時を経て、翻訳者となった著者の分身ともいえる志摩がモスクワに赴き、かつてのクラスメートとオリガの半生を辿ります。

苛酷なスターリン時代を伝説のオリガがどう生き抜いたのかが、たくさんの資料をあたって探り当てて行き暗黒の時代が手にとるように伝わってきます。強制収所では、どんな暮らしが営まれていたのか、どんな苦労があったのか、描写の細かさに圧倒されました。読み出したら先が気になってやめられなくなりました。

３０年の時を経てかわす友人との会話が生き生きしていて若々しい。子ども時代が目に見えるような表現がいいです。暗いだけの話になってないのが良かったです。

「打ちのめされるようなすごい本」は没後に出版されました。

１９９５年から２００６年までの米原さんの読書日記とすべての書評を集めた本です。一日に７冊読むという読書量に打ちのめされました。

イラク戦争に関する本もたくさん紹介しています。胸にこたえたのは「癌治療本を我が身を似て検討」した読書日記でした。「私に体力気力が戻ったなら『お笑いガン治療』なる本をまとめてみたいと思うほど悲喜劇に満ちていた。」と語り、深刻な状況にあっても前向きにさまざまな治療法にチャレンジする姿に勇気づけられました。

私とは一歳違い。素晴らしい才能が惜しまれます。

井上ひさしが解説に「彼女は決して弱音を漏らさなかった。最後まで感傷に流されずに思索をつづけたつよい精神が、この一冊にいまも棲んでいる。」と記しています。

お知らせ

○「新北海道の花」で紹介した梅沢俊さんが「森林に命を託す花ばな」～北国の天然林に魅せられて～と題する講演します。６月１５日かでる２・７。６時からです。是非ご参加ください。無料です。
○友人の岩村和彦さんが「ｇａｎさんが遡行　北海道沢登り三昧」を出版しました。チラシを同封しました。是非お読み下さい。

映画

「善き人のためのソナタ」（独）

Ｆ・Ｈ・Ｖ・ドナースマルク監督

８４年、東西冷戦下の東ベルリン。国家保安官のヴィスラー（ウルリッヒ・ミューエ）は国の命令で劇作家ドライマンと同棲している女優クリスタを監視するため盗聴を始めます。

屋根裏で盗聴を続けているうちに、ヴィスラーに変化が起きます。二人の自由な会話や美しい音楽。ブレストの詩が心にしみていき静かにヴィスラーの哀しみと歓びを物語ります。同時に監視社会の息苦しさや残酷さが浮き彫りになります。理想を掲げた共産主義とは裏腹な世界がそこにはありました。しかもついこの間まで監視保安省が存在していたことも驚きでした。

誰よりも国家と党を信じていたヴィスラーが、自由を語る劇作家の生き方に心の氷を溶かされていくのが素敵でした。

国家の命令に背いたヴィスラーは、閑職に追いやられますが今まで知ることのなかった新しい人生に目覚めていきます。暗い目をしていたヴィスラーの晴れやかな表情が印象的でした。自由に生きることのかけがえのなさを改めて感じました。

監督は歴史学者や、目撃者からの取材、記録などの調査など４年を費やしたそうです。戦前に逆戻りするような風潮にはしっかり抵抗していかなくてはと思いました。

「ケス」（英）　ケン・ローチ監督

６０年代後半のイギリス・ヨークシャー地方の炭鉱町。１５歳の少年ビリーは母親と炭鉱で働く粗暴な兄との３人暮らし。学校では先生や生徒といざこざばかり起こすし、将来の夢や希望があるわけでもない。

そんなビリーにとってただひとつの楽しみは餌づけに成功したハヤブサと戯れることでした。ケスとはビリーが名付けたハヤブサの名前です。孤独なビリーの唯一の友人でした。

炭鉱町で暮らす人々の生活が、生き生きと描き出され、ケン・ローチのいつも社会の片隅に生きる人たちによせる温かさに共感します。黙って、ビリーを見守る大人もいいです。そんな一人である教師にハヤブサを見せ「ハヤブサは飼い慣らせない。人に服従しないから好きなんだ。」と語るシーン。大空高く舞い上がるケスを見つめるビリーの心も自由です。

家庭にも学校にも居場所がないと感じている少年の繊細な内面をみずみずしく演じたビリーが良かったです。結末は悲しいですが自分の世界を持った少年は、きっとハヤブサのように雄々しく飛び立っていくに違いありません。ふっと自分の子ども時代を思い出しました。

お便り

■みな子さん、インターネットの時代だからこその手作りミニコミ紙です。前号では、山トイレフォーラムの内容がいち早く記事になり読むことができました。ありがとうございました。読書感、映画鑑賞、各種イベントや人の取材などご苦労が滲み出ています。人権問題の継続的な発信は、銀河通信の大切ななミッションですね。銀河通信はみな子さんそのものだから。最初、こんな人もいるんだと新鮮な驚きが今も忘れません。（Ｎ・Ｙさん）

■銀河通信がピンチだということでびっくりしました。銀河通信が届くたび、他の読者の人と同じようになんだか元気づけられたり、面白そうだなあと興味を引かれたりと毎回うれしく楽しみに読んでいました。読者の一人として、ぜひ続けられるよう応援しています。（Ｓ・Ｍさん）

■存続の危機を吹き飛ばし頑張ってください。私もいろいろなストレスに耐えて今だクビにもならず仕事頑張っているのですから。（Ｋ・Ｔさん）

■家族の成長と共に、今日のように公共性を帯びた姿に変化させている。それは貴女自身の成長なんですよね・・貴女の感性が豊かだったからでしょ・・　「自然保護」へと向けていく視点がいいですね！今後も楽しみにしています。（Ｙ・Ｓさん）

■北の国からのあなたの便り、映画や本の感想などいつもいつも楽しみにしているのです。
（Ｍ・Ｓさん）

■山に登るだけでなく保護し守って行こうという強い行動に感動します。映画欄も本の紹介もみな子さんの生の声が伝わってきて毎回とても楽しみに読ませてもらっています。（Ｎ・Ｅさん）

春の土

樋口みな子

春の日射しに誘われて、野幌森林公園を散歩しました。雪山に親しんできたので、雪のない森は久しぶりです。シジュウカラがツツピー、ツツピー、ヒガラがツピン、ツピン、ハシブトガラがチョーチョーチョとさえずり、春の森はいのちが躍動しています。野鳥たちが絶えず話しかけてくるようで、ひとりで歩いていても心が弾みます。アカゲラのドラミングが森中に響きわたっています。半年ぶりの感触を確かめるように、軟らかな土をしっかりと踏みしめました。

長塚節の小説「土」の一節に「春は空からそうして土から微かに動く」とあります。命をはぐくむ春の土では、ザゼンソウやミズバショウがもうすぐの開花を待っていました。雪に覆われていた小川は、春の光を浴びてきらきら光り、エゾエンゴサクもポツン、ポツンと咲いています。もう今頃は群落になっているでしょうか？

金子みすゞの詩「土」にはこんな一節があります。

「打たれぬ土は　踏まれぬ土は　要らない土か。いえいえそれは　名のない草の　お宿をするよ。」

19年も発行を続けてきた家族新聞「銀河通信」の発行に行きづまり、悩んでいた私に、みすゞの詩は「あなたはあなた。そのままでいいのよ」と言ってくれているようで、前に進む勇気をもらえたのでした。

これからも「名のない草のお宿」をつづけよう。森の中でたったひとりで咲いているのに力強いナニワズの黄が目に鮮やかでした。

（江別市在住）

ナニワズの花

購読料をありがとう　０７．３．１７～５．１３

今年の７月で銀河通信を発行して１９年になります。いままで読者の皆さんに支えられてなんとか続けることが出来ました。

毎回、印刷と送料で３万円かかります。前回発行の時点で後１回の発行しか出来ないことがわかり、メールで通信の存続の危機を訴えました。たくさんの方からメールや手紙で「楽しみにしているから続けて」との声をいただきました。また過分なカンパをいただき、本当にありがとうございます。

あなたの購読料が銀河通信を支えます。年間１，０００円ですのでご協力ください。よろしくお願い致します。

インターネットで読める方法も考えています。そちらを希望される方はお知らせください。

朝日守（旭川市）藤内英夫（札幌市）田島祥光（帯広市）渡辺妙子（札幌市）神原照子　（登別市）河村健（札幌市）高畠拓生（嘉麻市）安立尚雅（札幌市）大久保フヨ（北広島市）武田一生（岩見沢市）田中清子（岩見沢市）江部靖雄（札幌市）森武昭（狛江市）安田成男（札幌市）森内美江（江別市）土岐政美（札幌市）菊池和美（札幌市）三浦恵美子（旭川市）坂口一弘（函館市）

カンパも含めての方　中川悦子（札幌市）５，０００円　小笠原実孝（札幌市）１０，０００円　星原信之（札幌市）５，０００円　沢田正（広島市）５０，０００円　小杉和樹（利尻町）１０，０００円　仲俣善雄（札幌市）３，０００円　小山健二（札幌市）３，０００円　水野スウ（津幡町）３，０００円　ＨＹＭＬ２，４００円　塩川哲男（札幌市）図書券１０，０００円　小笠原実孝（札幌市）切手１００枚　梅沢俊　著書「新北海道の花」　岩村和彦　著書「ｇａｎさんが遡行　北海道沢登り三昧」　（敬称略）　合計１１７，６００円